
Hot Hearts

しゅ～と

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hot Hearts

【ZPDF】

Z6881

【作者名】

しゅーと

【あらすじ】

「同じ高校でバッテリーを組みたい」そう思って同じ高校を受験した鳴沢 将人と桐生 恋一。
だが鳴沢は受験に失敗して
熱い野球ストーリーがここにある。

Pr ologue

Pr ologue

3月上旬。小学生、中学生、高校生にとっては卒業のシーズン。

別れの季節もある。

そして、卒業式を終えた中学生には高校受験というものが待つている。

感傷に浸っている暇もなくみな勉強に励む。

そうして受験を終えたら終えたで今度は結果発表までの時間がこれまたしんどいものである。

満足な出来のものは一安心であろうがそうでないものにはこの時間はまさに地獄である。

ここにいる一人の少年も“そうでないもの”的一人である。
「ダメだ。ぜつてーに落ちた。なんでもっと勉強しなかったんだ~」

大柄で筋肉質な体格である。とても中学生には見えない。

「大丈夫だつて! 今年はそんなに倍率高くないからきっと受かってるよ」

「ちからは体格」それは一般的の中学生と変わらないが凛々しい顔立ちに

よつて大人びた印象を受ける。

「お前は自己採点良かつたからそんなこと言えるんだろ……俺なんてボロクソだつたんだぞ…」

「でもギリギリ合格ラインの点数はあつたじゃないか！…本当にギリギリだけど」

「たつた2点合格ラインより上なんて不安で仕方ねーよ」

思わず大人びた少年は苦笑いを浮かべる。

「早く同じ高校でバッテリー組みたいな」

「ああ。俺も早くお前とバッテリー組みてえよ」

2人はそろつて部屋に飾つてある金色の盾を見つめた。

“AA世界野球選手権大会優勝”と刻まれていた。

そして時間は流れていよいよ合格発表の日が来た。

「眠てえー。さすがの俺も昨日は緊張して疲れなかつたぜ」

そつ言いながらダルそつに眼をこする。

「俺も昨日は全然寝れなかつたよ

「余裕のくせに良く言つぱ」

「そんなの結果が見るまで分からぬじやん」

会話をしながら歩いていると2人が受験した高校の前までやつて来た。

和歌山県立 翔和高校しょわこう

昨年度の和歌山県の夏の覇者で和歌山県の中でも甲子園出場最多数を誇る野球の名門校である。

2人が到着した頃にはすでに大勢の受験生たちが結果はまだかまだかと待っていた。

現在午前9時57分。結果が掲示されるのが午前10時である。

「なんかみんな頭よさそうだね…」

「ああ…やっぱり受かってる気がしねえよ…」

周りの受験生たちがさつきにも増して騒がしくなっている。

教師らしき者たちが大きな紙を持って受験生の前に現れたのだ。

そして午前10時。丸められていた紙が広げられ、びつしりと書かれた数字が現れた。

「やつた――!――番号あつたぞ!」

「あつたあつた!」これから同じ学校だね!」

結果を知った受験生のほとんどが歓喜の渦に包みこまれ、友達と手を取り合い喜ぶ者や携帯電話で報告をしている者など様々である。中には顔を覆つて崩れ落ちている受験生もいる。かわいそうなことに番号がなかつたのであろう。

2人の少年は人ごみの中をかき分けていく。

「えーっと俺の番号は…」

大人びた少年がたくさんある番号の中から自分の番号を探す。

「246…247…249…250…！」 将人！受かつてたぞ…
「あれ？将人？」

少年が大柄の少年の名前を呼ぶ。どうやらこの人ごみで途中はぐれてしまつたのだろう。

少年が辺りを見回す。右に4mほど離れたところに他の受験生と頭一つは違うであろう少年がいた。

大柄なだけあつてすぐに見つかつた。少年は人ごみをかき分けて大柄の少年に近付く。

「将人！俺は受かつてた…ぞ…」

声をかけたが最後の方は声が消えかけていた。

大柄の少年は棒立ちで無表情な顔で貼り出された紙を見つめている。

「…将人？」

「『じめん 令一。俺落ちたわ』
『れいじ

少年と顔を合わせず、立つぶやく。

「ホント『じめん』……『じめん』」

一回少年の方を見ると大柄の少年は校門の方へ歩いて行った。

少年は追いかけることができなかつた。

別れの季節でもある。

「将人！もういい加減起きなさい！春休みだからっていつまでも寝てるんじゃないよ！！」

そう言つて布団を強引に引っ張がす。

「うう…うるせえな…どんだけ寝ようが俺のかつてだらうが…」

奪われた布団を再び取り戻し眠りにつこうとする。が、

「今日は野球部見てくるつて昨日言つてたでしょー。さああと起きなさい…！」

閉じかけていた目がその一言で見開く。

「あー、そうだったわ」

大きな体をベッドから起り、階段を下りて洗面所へと向かう。

蛇口をひねり水を出す。手を差し出すと程よい水の涼しさでさうこ
目が覚める。

顔を洗つて歯を磨きしつかりと口をゆすいでからリビングに行くと
そこにはベーコントッピングとこんがりと良く焼けたトーストが用意さ
れていた。

「いただきます」

両手を合掌して勢いよくトーストにかじりつぐ。

「やついえば最近怜一君遊びに来ないわねえ。何かあったの？」

ピクッと手が止まる。

「ああ、翔和高校は野球部寮があるんだよ。だからもういちばんにかいねえんだよ。言つてなかつたか？」

「聞いてないわよー。だつてアンタ受験に落ちた日から怜一君の話全然しなくなつたんだもん」

あの時に記憶が蘇つて来る。

28番。俺の受験番号だつた。

27番と29番はあつた。でも、俺の番号はなかつた。
何回も自分の受験番号を確認したし合格発表者の紙も見た。
でもやっぱり俺の番号はなかつたんだ。

不意に周りが静かになつた。

さつきまではあんなに騒がしかつたのに今は何も聞こえない。

心臓の音だけが妙に響いてきた。

心臓の音つてこんなにひるせえんだなつて感じたのを今でも覚えて
いる。

「将入〜俺は受かつてた……ぞ…」

怜一の声が耳に入つて來た。その瞬間周りはさつやと回りまつて騒がしくなつた。

俺は謝ることしか出来なかつた。

約束守れなくてごめんつて謝りたかつた。けど、その言葉は出てこなくてごめんしか出てこなかつた。

バッテリー組めなくてごめん。

「ちょっと将入ー。早く食べちゃつてちょうどだい。お母さん忙しいんだから」

母の一聲で現実に引き戻された。

「わ、わかつたよー」

ベーハンホッグをトーストの上に乗せて一気に平らげる。

「うわーもん。んじゃあ行つて来るわ

「はーい。気をつけね」

昨日のうちに玄関に用意してあつたスポーツバッグを肩にかけて家

を出る。

車の横に止めてる青色の塗装が施された自転車にまたがり目的地へと出発した。

5分ほどすると学校が見えてきた。春休み中といえど部活をしている生徒はいるので正門は開いていた。

正門を左手に曲がったところに広いグラウンドがあった。覗いてみるとサッカー部や陸上部が黙々と練習をしている。しかし、どこにも野球部らしい者はいない。
サッカーボールはあっても野球ボールはない。
サッカー「ゴールはあってもベースはない。」

「おつかしいな。今日は休みか？」

首を傾げる。誰かに今日は野球部はどうしたのか聞こうとした矢先、4人組のちょっとした集団がこちらに向かつて歩いてきた。

ちょうどよかつたと話しかけてみる。

「すいません。今日は野球部って休みですか？」

4人が顔を見合わせる。そして不思議そうにこちらを見る。

「野球部はこここのグラウンドじゃやってないんだよ。俺らも今から第一グラウンドに行くつもりだから一緒に来るか？」

「おう！頼むぜ！…つてじゃあアンタらも野球部？」

「そりそり。俺ら全員今年入学なんだ。最近顔出して体動かしてんのよ。君も今年入学？」

「ああ。俺は鳴沢将人ってんだ。よろしくなー。」

「よろしく。俺は天谷猛。なるさわ あまやたけるこれからよろしく」

こんがりと焼けた肌に坊主頭。さらに高身長。まさに野球部と言つた感じの男だ。

「僕は大村進次おおむら しんじ！ よろしくね！ 鳴沢つち！」

ひょこっと天谷の横からいきなり出てきた。

あまりの小ささに鳴沢の視界からは完全に消えていたのである。その小ささと童顔も相まって小学生に見えてもおかしくない。

「な、鳴沢つち？…まあよろしくな。てか身長いくつだお前？」

「むっ！ いきなり人のコンプレックスに触れてくるとは失礼だな！…でも教えてあげよう。僕は160cmだ！ とうとう大台の160cm台になつたのだ！…」

眩しいほどの笑顔で鳴沢にVサインする。

こうしてみると本当に高校生が怪しい。小学生と言つても十分通用するだろ？。

「ホントは159cmだけどな」

天谷が冷静に突つ込みを入れる。

「159回も160回も一緒にもん…。」

「全然違つて…」

「100くらいいまかしても分からぬもん…。」

大村が顔を真っ赤にして天谷に言い寄つてゐる。

「まあまあ大村もムキになるなつて。俺は吉井慧。よゐしぐ、鳴沢

大村をなだめながら鳴沢に握手を求めた。

鳴沢もそれにこたえて握手を交わした。

「あ、着いたぞ」

そこには立派、とまでは言えないがそれでも野球をするには十分に整備されたグラウンドがあつた。

「おおー。こんなところにグラウンドがあつたのか

グラウンドの端にある鏽びれた扉を抜けてしばらくしたところここ
のグラウンドはあつた。

初めての者には決して分からぬ場所だつ。

「もうすぐ先輩も来ると思つたゞそれまでキャッチボールでもする
か?」

「いいねーすぐ用意するから待つてくれよー。」

スポーツバッグからキャッチャーミットを取り出して適当に天谷と距離をとると、

「待てよ鳴沢。 キャッチボールより俺の球受け取れよ

今まで全く会話に参加せず終始仏頂面だった男が初めて口を開いた。「へえー。俺がキャッチャーだつて分かるのか。…ああ、ミット持つてるからか」

「そんなんじゃねえよ。…田辺ベイレックス出身、全日本正捕手の鳴沢将人君」

「はは…もしかして俺って有名?いいぜ、受けてやるよ

そして鳴沢はホームベースへ、仏頂面の男はマウンドへと向かう。

「おい荒賀!あんまり勝手な真似すると怒られるぞ…!」

「ちょっと投げるだけだ。大丈夫だ」

そう言つて荒賀と言われた男は足場をならす。

「いきなり投げるのか?肩作らねえと危ね

「肩ならもう作つてある。心配するな

「そーかい。そーかい。なら、好きなところ投げてきな

鳴沢が大きく両手を広げ、それから右手でミットを叩いて構える。

「（久しぶりだな。人の球取るのは）」

「（鳴沢将人…お前の実力、俺が見てやる！）」

荒賀が大きく振りかぶった。そして左足をあげて腕をしならせて投げる！！

グラウンドに乾いた音が響き渡った。

「ナイスボール。結構いい球放るじゃん

荒賀にボールを返球する。

ボールをグラブに收めるとすぐさま投球動作に入つて…投げる！

同じ作業を何回も繰り返す。

十数球投げたところで荒賀が口を開く。

「次、カーブ行くぞ」

「オッケー。カーブでもスライダーでも何でも放つて來い」

荒賀が投球動作に入つてボールを手から放つ。

「こまでは今まで通りだがベース直前で球が斜め下に大きくスライドする！」

「つとー！」

鳴沢はミシトに収めることができず前にボールを落とす。

「縦割れのカーブか。今時珍しい球だな」

「お前、あんまりキャッチングうまくねえな」

ただ一言言い放つた。その言葉を聞いて鳴沢は苦笑いを浮かべる。

「確かに俺はキャッチングもへたくそだしリードもうまくねえ。けどぜつて一ボールは後ろに逸らさねえから安心しなー！」

「クンッ

心臓が高まる音がはつきりと聞こえた。

いつもより速く鼓動している。血液が体中に行き渡るのが分かる。

「イツなら俺の全力を受け止めてくれる…

「鳴沢」

「何だ？」

「全日本代表のお前から見て俺の球はどうだ？」

「…正直ストレートはお前よりいい球放る奴なんてたくさんいるけどよ、カーブは自信持つていいぜ。あんなカーブそうそう打てねえよ」

「甲子園には行けるのか？」

甲子園その言葉が静かなグラウンドに響いた。

「行ける…一つ一か行くから安心しろ…」

大きな声がグラウンドに広がる。

「甲子園…ほ、本氣で言つてるの？」

吉井が少々引きつった顔でつぶやく。

「つたりめーだ…翔和高校を倒して甲子園行くぞ…」

「…ああ…」

荒賀が誰にも聞こえないような小さな声で、しかしはつきりとつぶやいた。

「てゆーか聞きたいんだけどなんで全日本代表の凄いキャラがこんな学校にいるの?」

大村が無邪気な顔で鳴沢に尋ねた。

「翔和高校に受験したんだけど落ちたんだよ。んでこのたけかわ武川高校に追募集で滑り込んだんだ」

「全日本代表なら推薦とかもあつたんじゃないの?」

「あつたけど友達と一緒に翔和に行く約束だつたんだ。でも…」

またあの記憶が蘇る。

消そうと思つても簡単に消えないあの記憶。

「…あ、悩んでも仕方ねえ!俺は武川に入学したんだ!俺はこの甲子園を目標すんだ!…!」

「俺も…俺も甲子園行くぞー!」

荒賀が叫んだ。今まで必要最低限の言葉しか出さずに感情を表に出さなかつた荒賀にみんなが驚いた。

「荒つちあんな大きな声出るんだ…」

「俺も初めて聞いたよ」

「つるせえな」

少し恥ずかしそうに荒賀が言った。そして鳴沢に近付き、

「荒賀 竜一」
りゅういち

もう顔は仮面に戻っていた。しかし右手が差し出されていた。

「鳴沢将人だ！」

鳴沢も右手を差し出し堅く右手を握り合った。

「」は病棟のとある一室。

4隅に一つづつ置かれているベッド。3つは白髪が入り混じった老人が占領しているが残りの一つにはまだ学生と思われる男がベッドに横たわっていた。

右足は包帯が巻かれていた。

男が暇そうに窓から見える何気ない風景を眺めていると不意に病室のドアが開いた。

窓から視線を外し、ドアの方に視線を向けてみるとそこにはこれまで学生と思われる若い男が2人立っていた。

1人は大きな背に服の上からでも分かる厚い胸板。その存在感に狭い病室が余計に狭く感じられる。

もう一人はきれいな長髪、にこにことした表情で優しい雰囲気が体からにじみ出ている。

「おお、^{しんざき}新崎に遊佐。^{ゆぞ}毎日悪いな」

「気にするな。足の調子はどうだ?」

新崎と遊佐、そう呼ばれた2人は病室にあるイスに腰を下ろした。

「もうほとんど治ってるぜ。あと2週間ほどで退院だ」

「ゆっくり治しなよ。時間はたっぷりあるんだから」

「1年が結構入って来たんだろ? やつと試合が出来そつなのにゅつくりなんて出来ねえよ」

「あと最低でも2人は必要だけどね。それは勧誘でもしてみるよ」「そういうことだ。それじゃあ俺たちはそろそろ行くか。これから練習なんでな」

2人はイスから立ち上がる。

「分かつた。練習頑張れよ。…さーつてまた握力でも鍛えるとしますか」

男はそばに置いてあつたゴムボールを手に取りテンポよく握る、開くを繰り返す。

「あんまり無理しちゃダメだよ」

「体動かしてねえと落ち着かねえんだよ。…この前はベッドの上で腹筋してて看護婦さんに死ぬほど怒られたからな。これぐらいしか出来ないんだよな~」

「…お前はバカか」

2人は病院から出ると、駐輪場に置いてあつた自転車にまたがり漕ぎ出す。

下り坂を下るとさすがに吹く心地よい春風を体全体で受け止める。

下り坂で加速した勢いを殺さないまま2人は平坦な道を駆け抜ける。

しばらくして学校が見えてきた。2人は正門から入り、駐輪場に自転車を止める。

「今日の練習はどうある？」

長髪の男が尋ねる。

「そうだな。昨日は守備練習中にやつたから今日はバッティング中心で行くか。俺は荒賀の球受けるから指揮はお前に任せた」

「分かったよ」

練習しているサッカーボルトや陸上部の邪魔にならないようにグラウンドの端を田指す。

そして錆びれた扉を開けて雑草や小石など荒れ果てた道を進んでいく。

「 したんだ！俺は！」で甲子園を田指すぞーー！」

第一グラウンドまで残り数十メートルといつとひりでグラウンドの外からでも聞こえるような大きな声が2人の耳に入つて来た。

「 聞いたことない声だね」

「 甲子園か。いい目標のやつがいるじゃないか」

声の主が気になつて2人の歩くスピードが上がる。

「 あつ！新崎さん、遊佐さんちわっすーー！」

「 ちわっすーー！」

いち早く2人に気付き挨拶した吉井の後に続きみんなが慌てて挨拶をする。

「 おお、ちわっす

「 おはよー！」

2人も挨拶を返す。そして、誰に言われなくとも1年生のみんなが2人のもとに集まる。

当然鳴沢もみんなの後について行く。

「 今日の練習だが……つとその前に」

チラツと鳴沢の方に視線を向ける。

「新崎さん。ここつも入部希望らしいですよ」

どうやら大きな背の男が新崎らしい。つまり自動的にもう一人の長髪の男は遊佐ということになる。

「鳴沢将人っす！ 今日から練習に参加させてもらいます！」

右手を額のところに持つていく。俗に言ひ敬礼だ。

「新崎だ。一応キャプテンやらせてもらってる。ここちは遊佐だ」

「よのしへ、鳴沢君」

笑みを絶やさないまま声をかける。ここに女生徒がいたら一瞬で恋に落ちてしまいそうなほどさわやかな笑顔だ。

「ポジションはキャッチャーか？」

「はい。そうっす！」

「よしよし、正捕手が入ってくれたか。これは嬉しい誤算だな」

新崎から小さな笑みがこぼれる。

「じゃあ今日の練習だが

「ちよ、ちよっと待ってくださいー！ これで全員なんっすかー？」

「いや、もう1人のんだが今は入院中だ」

「その人入れても8人つすよ！？1人足りねえじゃないっすか！！」

大きな身振り手振りで騒ぎ立てる。そんな鳴沢を見て、新崎は一呼吸おいて説明し始める。

「武川高校野球部は2年前に出来たんだ。新しく就任した校長が大の野球好きで作つたらしい。俺らが去年入部した時が初めての部員だつたらしくて当然人数も足りてないわけだから公式戦にも出場していない。だから学校のパンフレットとかには野球部は掲載されているが対外的に活動はほとんど行つていない」

「確かに武川高校なんて聞いたことなかつたな……」

「だが！！練習はきつちりと行つているぞ！3人で出来ることは限られていたがそれでも腐らずやつて來た。お前ら1年生が入つて来るのを楽しみにしてな。……鳴沢、さつき甲子園目指すつて言つてたのはお前か？」

新崎がまっすぐな目で見つめる。その鋭い眼光に思わず目を逸らしそうになつたが鳴沢もまっすぐな目ではつきりと言つた。

「はい。俺です」

「本氣で言つてるのか？」

「先輩は行けねえつて思つてるんですか？」

「……いや、お前以外の一年には言つたが俺は本氣で甲子園目指して

る。人数が集まればどんなチームでも俺は目指せると思つてこる

「気が合ひそーっすね」

「そうだな」

鳴沢が不敵に笑う。新崎もそれに笑い返す。

そして新崎が口を開く。

「武川高校野球部によつ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6881/>

Hot Hearts

2010年10月9日05時38分発行